



代表 岩井 忠熊

会費・会報代とも年3,000円

〔郵便振替払込口座番号〕

01060=7=15762

加入者名 燎原社

切り絵「八坂の塔」



田中 弘 作

山宣と私

民俗学者の橋浦泰雄さんで繋がる

蓮佛 亨

目先に囚われぬ、末永き心と心の交流

内山完造さんを偲ぶ上海の記念活動

―井上浩さんの話―

聞き手・文責 小田切明德

京都民主運動史の史跡あれこれ

岩井 忠熊

2006・6・29の日米首脳会談と  
日米共同文書の読み方

須田 稔

執筆者紹介

編集後記

# 山宣と私

## 民俗学者の橋浦泰雄さんで繋がる

蓮佛 亨

山本宣治が虐殺された一年三ヶ月後に私は生まれました。しかし

私は同じ宇治市に住んで「木幡地域の九条の会」で憲法を守る活動をし、「宇治山宣会



の顧問」の任に就いて、その意志を継ごうとしています。此のことは、決して偶然ではなく必然のように歴史的には繋がっていました。「療原」にてその経緯を皆様に伝え、民主運動

の体験の一つとして役立てればと考えて、その一端を寄稿するものです。

ことの始まりは、故西口克己氏が「山宣」一九五九年中央公論社版IIを執筆なさる過程で、山宣のメモに「蓮佛」とあるが誰のことか？と問われた、その時に始まります。直ちに、誰のことであるか分かりませんと答えたのを覚えています。しかし「蓮佛」という姓名は全国的にそんなに多くある氏名ではないことを知っていました。それから、誰のことかと関心は頭から離れませんでした。

そのうち佐々木敏二著「山本宣治」上・下巻、汐文社版を読んで、山宣の鳥取での「産児制限」講演会の主催者・水脈社（すいみゃくしゃ）に蓮佛重寿（しげとし）伯父が名前を連ねていたことを知りました。すると故橋浦泰雄（民俗学者・画家）の一人息子、赤志（あかし）氏が東京杉並区から戦中昭和一八年に疎開してきて伯父の家（本家）に下宿し、共に丸二ヶ年間鳥取第二中学校へ通ったことを思い出しました。重寿伯父は橋浦泰雄と親友であり水脈社の同人だったからです。橋浦泰雄家の在る東京の杉並区久我山は東京大空襲

の戦火をまぬがれ、古くからの泰雄氏の遺品はすべて残されています。遺影に献花するため一九七九年一月九日に行った時、書齋に泊めてもらったことがあり私はそのことを確認しています。その中に橋浦泰雄氏の作製した遺作品として「山本宣治の死に顔絵」二枚が残されていたのです。小型の一枚は下絵で、二枚目は畳二枚より小型の大作であるが、ナツブ（後出）一二回展には出品予定が実現出来なかったもようです。

橋浦泰雄氏とは、戦前故郷の鳥取で一九四二年代に二回逢い、戦後には忙しい息子に代理して、賀状の返信をハガキ絵を使って二月一杯かかって送って（八枚）来たものです。（挿絵：額に収めたもの）息子赤志氏は川崎市に在る赤志夫人の実家・鮮魚屋の手伝いをしていたからです。こうした文通によって多くの人との関わりを大切に、固め、形成し、その「組織力」ともいえる力量が認められて、柳田国男とは尊重しい協力しあって民間伝承の会（日本民俗学会）を発足させたのです。しかし、橋浦家は親子共々謙虚でひかえめでしたから、戦後長い間「山本宣治の死に顔絵」は陽の目をみず、大

月源二氏の絵が使用されて来たのです。八回の文通のうちに最終回の一九七九年の賀状で、「山宣最後の顔スケッチはまだ送らず、横着故。」と書いてきました。まだ最後の顔のスケッチが在ったのかと知り、宇治山宣会とはそのことの話がついていると早合点したのです。その年の十一月二日に泰雄氏は逝去され、その直後に献花に訪れるに当たって、赤志氏に電話し、最後の顔のスケッチを貰い受けて帰りたいと告げると、「大事なもののだからな」との答え。頂けるといふ話は未だついていないと、感じたのが率直なところでした。献花だけでも訪れたいと申入れ、訪ねました。歓迎を受け、御馳走になり一晩泊まり翌朝になると、山宣の死に顔絵のスケッチはきつちりと荷造りしてありました。アメリカ人と結婚している姉との贈る承諾をすでにとつていたのです。

私は五〇年九月月ぶりに山宣の生家・山本家・花屋敷に山本宣治の死に顔絵を届けました。ここで沼田秀郷氏宛ての橋浦泰雄氏の手紙（一九七八・五）の一部、一九二九年当時の事情をそのまま記述して伝えます。

「山宣が凶刃に仆れた際、私は

ナツプ（日本プロレタリア作家同盟）事務所に行ったので、居合わせた大月源二氏とともに直ちに山宣の宿舎にかけつけたのですが、まだ何人も来ておらず私らが最初だと宿舎の者は言いました。宿舎は二階で、曲がり階段を上がると最初の部屋で、山宣は仰向いて寝、額には小さな白布が被せてあるだけで、他には何の手も加えてありませんでした。白布を除いてみると額に小さな打ち傷があるだけでした。中略。私は大月と相談して、直ちにデスマスクを鈴木賢二に取らせるようにと決めましたが、不在の場合を安じて念のために二人でスケッチブックに写真しました。」以下略

は、遺骨箱として帰ってきた山宣は、やさしいパパではなかったに違いはありません、橋浦氏の絵は鉛筆画で精密であり、打ち傷もリアルに描かれており、死に臥せている父の姿を、初めて治子さんは見たのです、「アツ、パパヤ」とよんだのを想像します。

旧制中学校（三年生の時の夏に終戦）に昭和一八年以来終戦まで丸二年間一緒に通った橋浦赤志氏の名前に気付いて驚いたのは、父泰雄氏の人間としての偉大さを知った時です。一学年降格させられて疎開入学を許可された、鳥取県教育委員会の仕打ちは、許されない事柄です。東京は学徒動員で学力低下しているという理由だったのですが、鳥取も学徒動員で殆ど学習していないのは同じであって県教育委員会の一方的な判断です。通学中「亨さん」と呼んでいた赤志氏は、終戦後初めて話したときに「亨君」と呼ばれたとき、一つ年上だと、ハツと気付きました。日本軍が南方に進出しインドネシア・ジャワ島に進駐してゴム材が多量に入手出来たとして、半長靴がクラス全員に支給されました。鳥取県の東部は雪国であり、早朝の雪道は踏み込まれてい

なくて、国鉄の駅まで三〇センチばかりの深さの雪がありました。赤志氏は疎開中途入学であったから短靴しか持っていないので、時間をかけて先に雪道を作り、頑張つて通学したものです。最近に本家を訪ねて伯父夫妻の仏壇に焼香したのは、偉大で特高に目をつけられている泰雄氏の息子・赤志氏の疎開・下宿先をよくも戦中に引き受けて下さった伯母（父の姉）の強い意志に対して感謝したかったからでした。

ある時期、宇治山宣会は山宣記念館を建てようという企画を立てたことがあって、西口克己氏の推薦で企画委員会に建築家として加わることになり、何回か山宣息子の英治氏に逢い相談にのりました。最初に紹介をして下さったのは小山真一氏（日本共産党京都府委員会）でした。結局、花屋敷が買い取つてそのまま仕上げないままに在った土蔵を仕上げる図を描いて山宣資料庫を完成させました。それまでは資料や遺品は旧本館の二階の広間や廊下に集積されていました。土蔵を完成させて、事故で消失したりしない状況にやっとなりました。しかし資料・保存庫であつて見学出来る資料館ではあり

ません。

山本家の希望があつて、旅館業に役立つ絵ハガキを作製しました。山宣が生前住んでいた「新宅」と呼ばれる住宅は、当時山宣の助手

(京大)の描いたスケッチを参考にして、ニセアカシヤの樹の当時の大きさを(今は太くなりスドンと切つてある)当時に復元して描きました。住宅の偶部にある書斎は、治子さん、美代さん姉妹が最後までお使いになった様子です。遠望は対岸より塔の島越しに描き、

松の樹林の刈り込みが終わつて遮蔽物が少なくなつてから描いたかまいました。その他は受け付けフロントのあつた旧本館などです。私が宇治に移住したのは一九六二(昭三七)年でしたから宇治市民として四三年経ています。住んだ翌年一九六三年正月三日に娘(六才)息子(五才)の二人を連れて

善法より岡に登り、山宣の墓に「宇治に参りました」と報告しました。子供たちは何故参るのか不思議そうな表情をしていましたが、この頃には山宣との関わりがあろうとは想像だにできなかったことでした。

山宣の、育ち成長した宇治の地に住まわせてもらい橋浦泰雄、息

子の赤志、伯父重寿の思い出も含めて、生き甲斐の糧を授かったと感激しつつ、強く生き続けたいと思つています。山宣については、まだ不十分で知らないことの方が

多いのですが、関っている限り知つていくことになるから、更に感動しつつ生きていきたいと思つています。

## 目先に囚われない、末永き心と心の交流 内山完造さんを偲ぶ上海の記念活動

井上 浩さんの話

内山完造さんは主として、上海にあつて日中友好のために日中戦争時代から、戦後国交回復前の厳しい時期にも、一貫してこの活動のために心血を注いだ先駆者です。お話を聞きしたのは、宇治市小倉在住の井上浩さんです。完造さんの奥様・みきさんがご親戚にあたります(聞き手・文責 小田切明徳)

Q: 昨年の冬に、内山完造さんの生誕一二〇周年記念活動に参加されたようですが、その時の様子と内山会の活動についてお話をください。

A: 上海市文物管理委員会、上海市友好協会、中国工商银行上海市支社の主催、上海魯迅記念館、

中国工商银行上海市支社虹口支店共催で「内山完造先生生誕一二〇周年記念活動」への招待を受けました。そこで、内山会のメンバーと友好協会の役員で出

かけました。内山会とは、内山一族の方及び、上海内山書店関係者(当時の店員及びその家族、及び当時書店に出入りしていた方々、たとえば銀行員、会社員、僧侶等の家族も含む)の会で、一〜二年に一回集まり懇親をしております。

私になぜこの会に参加するようになったのかですが、一九七九年の秋、「上海のおっちゃん」の頌徳碑建立の募金運動があるから、「お前も協力したら」と

父から言われ募金したことがありません。我が家では「完造さん、みきさん」を「上海のおっちゃん・おばちゃん」と言うのが常でした。この除幕式には北京から文豪魯迅の一人息子(当時、

全人代)の周海嬰先生の参加があり、国内の多くの内山関係者とお会いすることができました。その五年後には、同じ井原市で完造生誕一〇〇周年記念講演会が行われ、周海嬰先生、上海魯迅記念館長楊藍女士、元店員王

宝良先生、竹内実京大教授にご講演いただきました。以降、内山会を開催して親睦を図り福山、東京、京都でやってきています。また上海への墓参り(魯迅、内山夫妻、王宝良先生)、魯迅記念館副館長以下館員の方々との交流をしております。以前、上海訪問時に頂いた本の中に、魯迅(R)と内山(U)との出会いを紹介した文章に出会いましたので、紹介いたします。

R: 老板、私は寝ていて一つの事を思い付いた。

U: どんな事ですか。

R: 私は、四億人の中国人は今みんな病に罹っている事に気付きました。

U:どの様な病気ですか。

R:その病気は「いいかげん病」です。この病気をうまく直さない中国は救う事ができません。、やつとあなた方の国日本にその種の薬が有ることを見出しました。それは日本人の「真面目さ」です。

魯迅先生がここで話した妙薬とは日本が明治維新の時、遅れた頑強な保守勢力を力ずくで変革し、勇敢に改革した真剣な進取の精神で、この精神が青年に備わり、魯迅の仙台での先生であつた藤野先生にも備わつていた。魯迅は彼らの「真剣」という妙薬とその効果を見出した」とあります。私が文豪魯迅の名前を耳にしたのは高校時代の父母の会話からでした。

Q:一二〇周年記念活動はいかがでしたか。

A:それまで中国工商銀行の二階にありました内山書店旧跡陳列室の拡張リニューアルの開幕式があり、日中双方の友好団体が魯迅、内山両氏の関係者が集い、内山完造さんの偉業を偲び、「内山先生の精神、活動力に感動」し、「先生に寄せられた厚情は日中友好願う人々に寄せられたもの」

と参加者で確認しました。

Q:ところで井上さんは内山完造さんにお会いになつておられたとお聞きしましたが、その印象をお聞かせください、

A:私が初めて会つたのは三歳の時で、一九三六年戦火を避けて上海から一時帰国された時です。私が直接血の繋がっている伯母との出会いは最初で最後で、奈良に行った写真が残っています。父母が食事の折、この上海の義兄夫婦の事を話していて、小倉から送つたお茶・「雁が音」(玉露の茎を集めたもの)を伯母が入れて、魯迅先生等書店に来られるお客さまに出しておつたと聞いております。小倉のことは著書「上海夜話」に出ております。「去年の八月から約半年この小倉村に生活して居る。時々原稿を書くのが何時も支那の思い出ばかりであるが、けふ(今日)は偶然小倉といふ土地のことに気がついて何か一つ書いて見たいなあと思つた。、、この小倉といふ所が宇治茶の高級品玉露の発祥の地」、 「両親や妻や弟夫婦が非常に心配して、何でも寒い時だからと、朝から出発のお祝ひをするといふて大きな鯛

を買つてきて赤いご飯を炊いてくれる。秋以来どこへ行つても全く素菜で通した私の頑固も、これによつて遂に破れ衣とならざるを得なくなつた。、、親心なるものが動く時、人はホントに無条件である理論を超越するものである。人の動かすものは真心である、親心である」と。

その後、伯父は帰国後、国内各地で講演に出かけておりましたが、一、二年に一回以上は元気な顔を見せていただいたのです。今も頭に残つている事がございます。朝鮮戦争勃発時に我が家におられたのですが、「大

変なことになつた」との一言です。

Q:最後に井上さんが内山御夫妻のご遺志を忘れずに活動を進めておられるモットーをお聞かせください。

A:今回の訪問の時、上海でも申し上げたことですが、目先に囚われない末永い心と心の交流に努めたく思つております。

この聞き取りに際しまして、宇治市会議員である川原一行さんにご案内頂き、ご一緒に聞き取りに加つて頂きました。御礼申し上げます。

## 京都民主運動史の史跡あれこれ

岩井 忠熊

私は竜安寺からも妙心寺からも徒歩で約五分の地に住む。四季を通じて内外の観光客がたえない。私じしんもその付近を運動のため

に歩きまわっている。ところで太田遼一郎全歌集「阿蘇」(一九七〇・

刊行会は京都の故児玉誠方)を開

いて「龍安寺」の教章が目にとまった。

百日紅いまさかりなる辻をまがれば  
龍安寺への道はひそけく

このあたり二十年のむかし

非合法の党連絡に  
しばしば来りし

かゝる庭を

蔵する京都

空襲の厄にあはざりき

守り継ぐべし

(一九四七年「時論」所載)

また「井上晴丸さんに」と題して

早春の雨しずかなりこのあたり

党連絡にしばしば来りしー妙心

寺境内・一九六五・四・八)

という歌もある。戦後、立命館大

学教授となった井上晴丸さんは、

妙心寺の塔頭に住んでおられた。

龍安寺も妙心寺も、私には解放運

動の史跡として目に映ずる。

東大路の近衛通りバス停(無論、

かつては市電の停車場があつた)

を降りると、広大な京大キャンパ

スの西南隅となる。楽友会館は、

戦前に進歩的サークルがさまざま

の学術的集會に仮装して会合した

記念すべき場所である。正面玄関

の真中がすり減った石段がその古

さを物語っている。いま語りたい

のはその楽友会館のすぐ北がわ、

東大路から京大吉田寮に入る銀杏

並木の右がわにある、学生集会所

と称するペンキのはげた木造二階

建てである。この今にもぶっこわ

れそうな貧弱な建物で一九二五年

にもたれた学生社会科学研究会第

二回大会の参加者達が、治安維持

法の最初の適用を受けて検挙され

た。普通に「京都学連事件」とよ

ばれるこの事件での地裁公判で三

七名が起訴され、野呂栄太郎や岩

田義道をふくむ全員が禁固一年―

八月の判決を受けた。その中には

栗原佑、泉隆のように戦後の京都

の運動に足跡をのこし、私にも面

影の記憶のある活動家がいた。前

記した歌集「阿蘇」の太田遼一郎

も被告の一人である。なおこの事

件は被告の控訴中に三・一五事件

等があり、決着がつくまでに複雑

な経過があつたが、いまは省略す

る。ただ私は今でも近衛通りのバ

ス停を通るたびにあの古ぼけた学

生集会所がどうなっているか、か

ならず確認するのがくせになつて

しまった。あの建物は歴史的文化

財として保護できないだろうかと

の思いをいだかずにはおれない。

私自身は一九四三年の「学徒出陣」

にさいして、あの集会所で京大文

学部教授会のメンバーによる壮行

会をもつてもらつた。

いまの京都の街は、応仁の乱と

一八六四年(元治元)の禁門の変

(蛤御門の変)でほとんど焼けた

跡に、主として明治以降に建設さ

れた。ほとんどの大都市が戦災の

ために焼けた中で、京都だけが戦

前の姿をのこしている。歴史的都

市といわれるゆえんだ。だからよ

く見れば、過去と現在が、歴史と

現代が、重なり合つて現われる。

## 2006・6・29の日米首脳 会談と日米共同文書の読み方

須田 稔

七月一日付「毎日新聞」の「社

説」は、「日米安保体制を軸とし

た強固な日米関係の必要性は高ま

つてい」て、「安定した関係を築

いた小泉首相の功績は評価してい

い」が、「東アジア外交の立ち往

生は、首相の対米関係での功績を

相殺した」と述べ、「問題は同盟

強化を軍事面で裏打ちする再編後

の在日米軍と自衛隊の連携のあり

方である。その延長線上で、自衛

隊の海外派遣を常時可能にする恒

久法制定の問題もいずれ浮上して

くるだろう。しかし、小泉首相は

こうした重要課題について説明し

ないまま去ろうとしている。」と

クレームをつけて終わる。

隔靴搔痒の感で読む。首相に説

明責任は確かにある。それ以前に

「自衛隊の海外派遣を常時可能に

する恒久法制定」などは、日本国

憲法の前文と第九条に宣言した平

和主義を明白に蹂躪するものでし

かないではないか。全国的大新聞

が、国の基本法を無視して突き進

む政治の状況に口を閉ざすところ

に、私は「戦前」あるいは「戦中」

の空気を嗅ぎとるのだ。ジャーナ

リズムとは何だろう。

「日米共同文書」を読むと、私

の憂慮は杞憂でないのではと思

いが強まるばかりだ。吟味しなけ

ればならないだろう言葉を挙げてみよう。

①「普遍的価値観」。二カ所。第一節の見出しが「普遍的価値観」と共通の利益に基づく日米同盟。その中身は「自由、人間の尊厳及び人権、民主主義、市場経済、法の支配」。アジアもこれに「一層掘って立つ地域へと変わりつつある」というときは、「民主主義」が最初に来て、「人間の尊厳」が無いのが何故なのか、理解できないが、アジアの人民に「人間の尊厳」は認めないというのか。

②「共通の」「共同の」「共有」。計一〇カ所。「共通の利益」「共通の脅威」「日米共通の価値観と利益」「共通戦略目標の策定」「地域における共通の課題」：「共同文書」「共同声明」「共同の取り組み」：「利益を共有」「認識を共有」。

③「協力」。計一カ所。「より広範でより強化された協力関係」「全球的規模での協力」「日米の安全保障協力」「弾道ミサイル防衛協力」「強固な日米協力」「イラン問題を含む不拡散面での協力」「日米両国は協力を強化し」「戦略的開発協調の下で緊密な

④「協調」。戦略的開発協調の下で緊密な協力を継続」。

⑤「地球的規模」。計六カ所。「二世紀の地球的規模での協力」「地球的規模でのエネルギー安全保障」「幅広い地球的規模の活動」「地球的規模の課題」「地球的規模でのエネルギー安全保障」「地球的規模での協力関係」。

⑥「世界」。計三カ所。「地域及び世界における日米協力の基盤」「地域や世界の経済問題」「世界の中日米同盟」。

⑦「国連」。日本の国連での重要な役割や貢献に鑑み」。

⑧「平和」。計二カ所。「アジア太平洋地域の平和と安定」「北東アジアの平和と安寧の維持」。

⑨「安全保障」。計七カ所に。「テロとの闘い」二カ所。(ブッシュは war on terrorism 「対テロ戦争」と言わなかったか。外務省の日本語訳はこれまでも偽計的であった。)

「普遍的価値」に「生命」「平和」「正義」がなくてよいのか。「市場経済」が普遍的価値と言えるものか。「法の支配」を言うが、国際法と国連憲章、合衆国憲法と日本国憲法を蹂躪してのイラク戦争ではないか。大雑把に言って、平均的アメリカ人と日本人の価値観が全面的に同じという事はありません。軍事と経済の世界戦略の上でだけ利益目標や課題認識を共有しているに過ぎないではないか。要するに、兇器を手にカネの力で全世界を意のままに御したい悪漢の親分と子分なのか。

ブッシュ政権が人類が共通に希求する普遍的価値の実現のために主導的役割を果たしていると考える人々は、全世界で圧倒的に少数派だろう。イラク占領に有志連合軍を派遣した国は、国連加盟国の当初は五分の一で今は八分の一、イラク戦争・占領支持のアメリカ国民もいまや三割台。「対テロ戦争」を積極的に支持しない人を「非国民」「非愛国者」呼ばわりする好戦勢力は、わたしたちの日本でも多数派になろうとして策動しているが、平和を希求して、その確固たる実現をめざして不屈に努力する人たちがその真の愛国者、地球

社会という生活公共圏の持続可能な発展を支える真の地球市民なのだ。愛国者にして地球市民である人びと、NGOやNPOは力をつけているのだ。

脅威を煽りたて軍事力と戦争体制の強化に狂奔する政治、国民の健康と福祉を迫害する政治をよしとする政権は、六一年前までの日独伊三国枢軸を想起させる。大新聞の社説の能天気さが怖い。

(2006・7・1)

表紙画作者・執筆者紹介

- 田中 弘  
たなか ひろし  
故人。  
元日本共産党京都府委員長。
- 蓮佛 亨  
れんぶつ とおる  
本誌会計監査委員。  
宇治山宣会顧問。  
宇治市在住。
- 小田切 明德  
おたぎり あきのり  
本誌編集委員。  
宇治山宣会顧問。  
京都市伏見区在住。
- 岩井忠熊  
いらい ただくま  
本会代表。  
立命館大学名誉教授。  
右京区在住。
- 須田 稔  
すだ みのる  
立命館大学名誉教授。  
宇治市在住。

## 編集後記

小泉首相はこの九月の自民党大会で総裁を辞任し、後任は安倍晋三官房長官となるそうだ。マス・コミはみなそう報道している。安倍長官は憲法改正のスケジュールをつくることと教育改革（教育基本法の改悪であろう）を政策の目玉として訴えている。憲法・教育基本法が目ざす方向はつまり戦争のできる国家をつくるということだから、イラク戦争支持と日米同盟強化という小泉政権の基本政策が堅持されることは疑いえない。靖国問題の小泉のやり方は、むしろ確信的に強まるのではなからうか。

昨年イタリアに行き、ヴェネツィアを見物した。ヴェネツィアは実に一一〇〇年にわたって王制を拒否し、市民による共和制を維持した。有名な文化史家ブルクハルトは名著『イタリア・ルネサンス期の文化』の第一章で、ヴェネツィアを「芸術としての国家」として描いた。ヴェネツィアはその当時にはやくも社会保障制度を実現していたのである。せまいヴェネツィアのサン・マルコ広場は世界中から集まった観光客で雑踏して

いた。京の清水どころではなかった。総監官殿は目を見はるばかりの美しさである。ヴェネツィアは川の三角州にできた島で、アドリア海に面し、つまり周りは全部水面になる。この共和国は一九世紀にナポレオンが陸上から大砲で包囲し、降服を要求した時に、それに応じて島を明け渡したことで終わった。見方によつてはまったくだらしないうち期だったといえる。だがこの降服によつてヴェネツィアは破壊をまぬかれ、今日の世界遺産として多くの観光客を迎え、繁栄している。

ところでアジア・太平洋戦争の終戦は、周知のとおりポツダム宣言による無条件降服の可否をめぐる最高戦争指導会議と御前会議の激論の結果、昭和天皇の「御聖断」によつて決定された。国民の世論の力でなく天皇の命令による決定という点で現在のわれわれからい

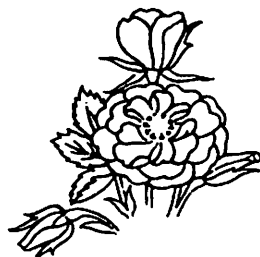
ってもたらされているといわざるをえない。ヴェネツィアのナポレオンに対する降服が賢明な判断だったと同様の感が残る。戦争犯罪人の裁判は、妥協を許されぬポツダム宣言での無条件の履行項目だった。靖国神社のA級戦犯合祀を当然とする人たちは、それでは本土決戦となることがよかつたと思つてゐるのだろうか。日本は侵略戦争の敗戦国なのだという歴史をきびしく認識すべきではなからうか。

実はこの号の原稿の集まりが大変にわるかつたので、編集子のみずから作文しようかとつとめた。酷暑の中であわてて調べた。しかし幸いに皆さんのお力で今号も立派な原稿がそろつたのだ。私の原稿はつぎにまわすことにする。しかしこの際に各方面から積極的な寄稿をお願いしてやまない。

最後にもう一つお願い。「燎原」六七号がどこにも見当たらず、編集子の手もとにもない。ヒヨットすると当時の編集者がウツカリして一号とばしたのではないかなどという失礼な推測もしているが、もし六七号をおもちの方があつたら、ぜひ編集委にご一報をねがいたい。

なお大正期に創刊された代表的な歴史学の雑誌「史林」（八九巻一号 二〇〇六年）掲載の田中真人「民主主義・平和主義・社会主義―日本共産主義運動史研究の最近の一〇年―」によると、「燎原」は治安維持法下の事件を取り上げる地方刊物として唯一の存在となつてしまつたらしい。そういわれると、本誌の継続は一そう重要な責任をおわされたように感じられる。

(T・I)



会および会報については、左記へご連絡下さい。

「事務局」

〒六〇六一八〇七

京都市左京区高野東開町

一―三三 第三住宅

三三―三〇二 井手 幸喜

TEL FAX  
〇七五―七二一―三八二三